

平静でいられなかった平成の私

元号は妙なもので、実はいまだに元号にはなじんでいません。

1989年「平成」が発表された時に、元号を4度味わえる人はどんなことを考えるのだろうと思いましたが、何となく連続感のない違和感を覚えました。

新聞記事で、例えば単に“62年の”という表記があると迷ってしまいますし、役所や病院の書類表記でも戸惑います。

仕事では西暦でないとな号順に資料整理しづらいので、横書きの私はいまだに西暦で表記しています。

“20190212”とか、手紙では読みづらいので”2019FEB. 12 “という具合です。

今の平成天皇の深い人間性に感動していますが、昭和という言葉には戦争のイメージより、復興の明るさを感じます。

1968年、岡本太郎さんのアトリエで大阪万博太陽の塔設計を経験できたことで、昭和は私にとって明るい未来を感じ、その後の仕事も大いに愉しかった時代。

昭和には生涯の仕事を手にした懐かしさもあり親しみを感じます。

ところが、平成は私にとって大変不況感のある元号でした。

1990年（平成2年）に入り、メインクライアントの家電業界も突然不況感が高まり、仕事先を一気に失い始め、新規業界への営業で躍起に走り回りました。

私にとっては、仕事の喜びとは遠い借金返済の始まりでした。

平成時代が終わろうとしている中、関西万博開催を待たずに先日亡くなられた堺屋太一さんの「何もしなかった平成日本」のことばが妙に気になります。

（2019年2月12日記）

【太陽の塔】

